

【謹告】

東京交響楽団 第686回定期演奏会 出演者・曲目一部変更のお知らせ

本日の東京交響楽団 第686回定期演奏会に出演を予定しておりました音楽監督ジョナサン・ノットは、新型コロナウイルスの感染症に係る入国制限により来日ができなくなりました。代わって
広上淳一が出演いたします。また出演者の変更に伴い、曲目を一部変更して開催いたします。

何卒事情をご賢察の上、ご了承くださいませようお願い申し上げます。

公益財団法人 東京交響楽団

第686回 定期演奏会

2020年11月15日(日) 2:00p.m. サントリーホール

Subscription Concert Series No.686

Sun. 15th. November 2020, 2:00p.m. Suntory Hall

広上 淳一 [指揮]

Junichi Hirokami, Conductor

小菅 優 [ピアノ]

Yu Kosuge, Piano

水谷 晃 [コンサートマスター]

Akira Mizutani, Concertmaster

ベートーヴェン: 序曲 ハ長調「命名祝日」
作品115(7')

L.v. Beethoven: Grand Overture in C major
"Name-Day", op.115 (7')

矢代秋雄: ピアノ協奏曲(35')

A. Yashiro: Piano Concerto (35')

I. アレグロ・アニマート

I. Allegro animato

II. アダージョ・ミステリオソ

II. Adagio misterioso

III. アレグロ-アンダンテ-ヴィヴァーチェ・モルト・カプリツ
チョーソ

III. Allegro-Andante-Vivace molto capriccio

休憩(20')

Intermission(20')

ベートーヴェン: 交響曲 第4番 変ロ長調
作品60(34')

L.v. Beethoven: Symphony No.4 in B-flat
major, op.60 (34')

I. アダージョ-アレグロ-ヴィヴァーチェ

I. Adagio-Allegro vivace

II. アダージョ

II. Adagio

III. アレグロ・モルト・エ・ヴィヴァーチェ

III. Allegro molto e vivace

IV. アレグロ・マ・ノン・トロツポ

IV. Allegro ma non troppo

●主催/公益財団法人東京交響楽団 ●特別協賛/株式会社エイチ・アイ・エス

●助成/文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会



11/15 SUN.



© Masaaki Tomitori

Junichi Hirokami

Conductor

広上 淳一 [指揮]

東京生まれ。東京音大指揮科に学ぶ。26歳でキリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクールに優勝。これまでノールショピング響、リンブルク響、ロイヤル・リヴァプール・フィル、コロンバス響のポストを歴任。フランス国立管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、コンセルトヘボウ管、モンリオール響、イスラエル・フィル、ロンドン響、ウィーン響、サンクトペテルブルク・フィルなどへ客演を重ねる。国内では全国各地のオーケストラはもとより、サイトウ・キネン・オーケストラ、水戸室内管にも度々招かれ絶賛を博している。オペラでもシドニー歌劇場へのデビュー以来、国内外で数々のプロダクションを指揮。現在、京都市交響楽団常任指揮者兼芸術顧問。2015年、同響とともにサントリー音楽賞受賞、常任指揮者として13シーズン目を迎えている。2020年4月より京都コンサートホール館長も務める。2017年より札幌交響楽団友情客演指揮者。

Born in Tokyo. He began his conducting career at the age of 26 after winning the first Kondrashin International Conducting Competition in Amsterdam.

Between 1988 and 1995, Hirokami was Chief Conductor of Sweden's Norrköping Symphony Orchestra. Since then he served as Chief Conductor of the Limburg Symphony Orchestra (1998-2000), Principal Guest Conductor of the Royal Liverpool Philharmonic (1997-2001), Principal Conductor of Japan Philharmonic (1991-2000), and Music Director of the Columbus Symphony Orchestra (2006-2008).

In recent years, he has been a guest conductor of orchestras which include the Vancouver Symphony Orchestra, L'Orchestra Sinfonica di Milano Giuseppe Verdi, the Saint Petersburg Philharmonic Orchestra, the Tchaikovsky Symphony Orchestra of Moscow, the Baltimore Symphony Orchestra, the Cincinnati Symphony Orchestra, and Gewandhausorchester Leipzig.

Hirokami is currently Chief Conductor and Music Advisor of the Kyoto Symphony Orchestra. In 2015 he received 46th Suntory Music Award with Kyoto Symphony Orchestra together.

He serves as professor at Tokyo College of Music and guest professor at Kyoto City University of Arts.



©Marco Borggreve

Yu Kosuge

Piano

小菅優 [ピアノ]

2005年カーネギーホールで、翌06年にはザルツブルク音楽祭でそれぞれリサイタル・デビュー。デュトワ、小澤等の指揮でベルリン響、フランクフルト放送響、シュトゥットガルト放送響等と共演。10年ザルツブルク音楽祭でポゴレリッチの代役としてヘレヴェッヘ指揮カメラータ・ザルツブルクと共演。2010年から15年にはベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会(全8回)を東京、大阪で行い各方面から絶賛を博した。現在はソロだけでなく室内楽や歌曲伴奏を含む、ベートーヴェンのすべてのピアノ付き作品を取り上げる新企画「ベートーヴェン詣」に取り組んでいる。2017年第48回サントリー音楽賞受賞。2017年秋より取り組んでいる4つの元素「水・火・風・大地」をテーマにした新リサイタル・シリーズ『Four Elements』が今秋に最終回を迎える。

With her superlative technique, sensitivity of touch and profound understanding of the music she plays, Yu has become one of the world's most noted pianists of her generation.

At the age of just nine she made her debut with the Tokyo New City Orchestra, before moving to Europe to continue her studies in Hannover and Salzburg and received great support and inspiration from Andrés Schiff.

She appears at the most important venues in all over the world.

As well as regular performances in Asia and with all the major Japanese orchestras, she has worked with many of the leading European orchestras.

Yu Kosuge's more than 15 recordings on SONY include the Études by Liszt and Chopin, concertos by Mendelssohn and Mozart, as well as, among others, the complete 32 Piano Sonatas by Beethoven. In November 2017 she has started new series of recital "Four Elements".

11/15 SUN.

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)

序曲 ハ長調「命名祝日」 作品115

ベートーヴェンの遺した11曲の序曲のうち4曲は、彼唯一のオペラ『フィデリオ』の数度にわたる改訂上演用とその都度作曲された『レオノーレ』序曲第1~3番、及び『フィデリオ』序曲である。この4曲のほか、バレエ用の『プロメテウスの創造物』序曲、舞台劇用の『エグモント』序曲、『アテネの廃墟』序曲、『シュテファン王』序曲、ヨーゼフシュタット劇場のこけら落とし祝典劇用の『献堂式』序曲の5曲は、いずれも舞台作品の幕開け用に書かれた。つまりこれらには本編作品が存在するが、残る2曲『コリオラン』序曲とこの『命名祝日』序曲には本編がなく、序曲のみの独立作である。うち『コリオラン』序曲は、ヨーゼフ・コリン(1771~1811)が1802年に上演した戯曲『コリオラン』に触発されて書かれたことがほぼ明白なもので、主題にも戯曲の登場人物が踏まえている。ところが、『命名祝日』序曲にはそのような由来作すら見いだせない。

この曲が着想されたのは1809年で、途中で中断があって1815年に完成、同年12月25日にレドゥーテンザールで開催された聖マルクス市民病院基金募集のための仮装舞踏会で初演された。1825年4月に出版された初版譜のタイトルは『大オーケストラのためのハ長調の序曲』であったが、スコアに、ベートーヴェン自身が「1814年ぶどうの収穫の月1日、われらの皇帝の命名日の夕べに」が書き込んでいたことから『命名祝日』序曲と呼ばれている。「われらが皇帝の祝日」とは当時のオーストリア皇帝フランツ2世の命名祝日1814年10月14日のことだが、その日にはまだこの曲は完成しておらず、曲の一部すらその日に演奏されたという記録もないので、この但し書きは後付けであろう。

ベートーヴェン研究家のマルティン・グスタフ・ノッテボーム(1817~1882)がこの曲のことを、第九の終楽章の構想中に湧き出た楽想の活用ではないか、と指摘しているように、壮麗で歓喜にあふれた調べはどことなく第九終楽章に通じるものを感じさせる。

萩谷由喜子 Text by Yukiko Hagiya

作曲:1809~1815年

初演:1815年12月25日、ウィーン、レドゥーテンザール

編成:フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部

11/15 SUN.

矢代秋雄(1929～1976)

ピアノ協奏曲

4年前に逝去した中村紘子は、戦後、日本の作曲界ならびにオーケストラ界を牽引してきた。矢代による唯一のピアノ協奏曲である本作も、中村を初演者とする前提で書き進められた。

22歳でパリ音楽院に入学をした矢代は、勤勉に研鑽を積み、メシアンの授業にも参加した。しかし、卒業作品の弦楽四重奏曲は、音楽院の方針との食い違いからほぼ評価されず、その価値を認めたのは、フローラン・シュミットら数少ない審査員だけであった(ちなみにパリで矢代は、オスカー・ワイルドの『サロメ』に触発されて序曲に着手したが、未完に終わった)。帰国後は緻密な創作活動を展開。1960年の「チェロ協奏曲」には尾高賞が贈られ、本作で2回目の尾高賞を受賞している。完全主義者と呼ばれる矢代だけに、作曲作業は慎重に進められ、完成に3年を要した。

当時は全き前衛の時代であった。その中で保守的とみなされがちな矢代であるが、本作には12音を音列化したセリー的主題法がみられるなど、その様式は多面的である。

第1楽章:アレグロ・アニマート 冒頭でピアノが奏する主題が道しるべとなり、ピアノ独奏部を挟みつつ曲は展開する(最初のピアノ独奏の素材はフィナーレでも活かされる)。この主題を奏する両手は完全なユニゾン関係にはなく、右手がオクターヴ上下行を含むため、響きは独特の生気を醸す。後半では弦を指板にあてる珍しいピツィカート奏法がみられる。

第2楽章:アダージョ・ミステリオソ 1音(ド)の連打によるリズムをくり返すことで曲は進展する。このきわめてシンプルな素材と手法を通した音響の七変化が聴きどころだ。

第3楽章:アレグロ・アンダンテ・ヴィヴァーチェ・モルト・カプリッチョソ 先行楽章の素材が狂想的展開に組みこまれる。クライマックスにあってさえ各パートの音がかっきりと感じられるクリアなテクスチュアが際立つ。

西田紘子 Text by Hiroko Nishida

作曲:1964年夏頃～1967年5月

初演:1967年11月29日東京、森正指揮、中村紘子独奏

編成:独奏ピアノ、ピッコロ1、フルート2、オーボエ2、クラリネット2(バス・クラリネット持替1)、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、バス・チューバ1、ティンパニ、シンバル、ウッドブロック、鈴、チューブラーベル、タムタム、ヴィブラフォン、弦5部

11/15 SUN.

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)

交響曲 第4番 変ロ長調 作品60

神秘的な序奏がホールを満たす。アダージョのテンポでG♭-E♭-F-D♭(変ト-変ホ-ヘ-変二)と下降する弦。テンポや音高、雰囲気は別として、交響曲第5番ハ短調通称「運命」の動機が潜んでいるかのよう。ドイツ・ロマン派オペラの始祖ウェーバー(1786~1826)が驚嘆したこの開始部。さてベートーヴェンはハイドン(1732~1809)のオラトリオ「天地創造」の序奏(混沌の描写)から何らかの靈感を授かったか。

ベートーヴェンの創作意欲が極めて旺盛だった1806年の夏から秋にかけて書かれた。ベートーヴェンこのとき35歳。

優れた音楽評論家でもあったシューマンならではの誉め言葉——北欧神話に登場する二人の巨人(英雄と運命を指す)の間にたたずむ清楚可憐なギリシャの乙女や、フランスの鬼才ベルリオーズの「第2番のスタイルに戻った」などの指摘に影響されてか、第4番は古典回帰的な交響曲と見なされた時代も長かった。しかし実際は、響きの移ろいに凝った第1楽章の創りが示すように進取の気性にも事欠かない。音階を芸術にした優美な第2楽章は、旋律「作家」ベートーヴェンの面目躍如たる音楽で、ちょっとしたアクセントや音楽の句読点が絶妙。出版譜によって微妙にイタリア語の速度・表情語が異なり、メヌエットという言葉が添えられることもあるアレグロ・ヴィヴァーチェの第3楽章は、事実上のスケルツォ。表情の変化に富み「運命」の動機も織り込まれた。ABABAの5部形式で、このフォーマットは約5年後に作曲される交響曲第7番の第3楽章に受け継がれる。そして楽の音の喜びが駆け抜ける第4楽章へ。ファゴットやクラリネットの小気味いいパッセージも聴き手の心を躍らせる。ユーモアの精神もたっぷり。

曲全体を通じ木管楽器、ホルンの音楽的妙技が際立つ。律動的な弦楽にトランペット、ティンパニの役割も心憎い。意欲作なのだ。

奥田佳道 Text by Yoshimichi Okuda

作曲: 1806年夏~秋

初演: 1807年3月ウィーン、ロプコヴィツ侯爵邸

編成: フルート1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部